



変化するものとしらないもの (もとに戻るものと戻らないもの)

8月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2020年8月1日(土)

先日、北海道から沖縄の公認会計士等約60人で組織している“優和会計人会”のセミナーがあり、公認会計士・税理士の佐藤等先生のご講演を聴いた。タイトルは、「**ドラッカーなら、何て言うだろうか、アフターコロナ社会の読み方等**」であった。

印象的だったのは、コロナの前後を通じて、“**変化しているものと、変化していないもの**”は何かという質問であった。それぞれで考えるようにということであったが、面白い質問だと思った。私は即座に、変化とは動くもの、**動くものとは新聞に載っているもの、動かないものとは新聞に載っていないもの**と感じたが、正解は解らない。

ドラッカーは、日本の山水畫に興味を持ち、有名な作品を70余点所蔵していたということで、そのうち2点の拡大写真が出された。中国の山水の風景の中に、舟の上や崖の下の道に小さく佇んでいる2、3人の人物という画である。

ドラッカーは、この風景の中へ入ってその人物になり、そこで何かを感じるのを好んだという。

ドリス・ドラッカー夫人の話では、“**夫は動くものが嫌いであった。映画も1年に1回ぐらいしか見なかった。**”ということである。

変化というのは、**社会の進歩**だと思う。

そして、この社会の進歩は、**大きな社会的事件が起きた後に、顕著に表れる**のではないかと思う。

社会が一ランク上がるような現象を**社会の進歩**と言い、それは大事件の後に現れるとするならば、今回の**新型コロナウイルス騒動は大きなチャンス**である。**社会の変化を予見するのは、極めて難しいが、大事件の後には、社会が変化する**ということを**比較的容易に確信**でき、その変化をもぼんやりと予想できるのではないだろうか。

それでは、その**社会の変化**とは何か。どのように変化するのか。

やはり、ものすごく難しい。しかし、**難しい予見をする絶好のチャンス**である。**変化しているものと変化していないもの**について考え、**動くものと動かないもの**を見極め、それを**社会の一段の進歩**としてとらえるのは、今のレベルでは**大きな挑戦**であるが、**やりがいのある経験**だと思う。

新しい世界の扉が待っているのは**確実**だから。